



しかし、お母さんの考えはまちがっていません。顔立ちが良い、良くないとい

いうことで、人の尊さが決まるものではないです。」

お母さん「私には、そうは思えないのだけれど。」

与右衛門「では、私の気持ちをお話ししましょう。久子は大変かしこく、その上、やさしくて温かい心をもっています。今、私が安心して学問に励むことができるのは、久子のお陰だと思っています。お母さん、どうか、これからは久子との別れ話など、決して口に出されず、このままにしておいてください。」

お母さん「そうかい。与右衛門の考えや気持ち、よく分かったよ。まちがったことを言って、すまなかったね。許しておくれ。」

与右衛門「お母さん、分かっただけで良かったです。私も、安心してました。」

⑩ 久子夫人が嫁いできてから、九

年の年月がたちました。今では、先生の学問所は絶えず門弟が出入りし、藤樹先生の名前は、ますます有名になりました。久子夫人は二十七



歳になり、家の仕事、門人や子ども世話で、大変忙しく暮らしていましたが、下の男の子を産ん

だあと、急に体を悪くしました。

久子「どんなさま、今日もすみませ

んが、休ませていただきます。」

与右衛門「久子、ここには、忙

しくてゆっくりと休むこともでき

ないだろう。亀山へ帰り、ゆっく

りと体を治しなさい。」

久子「でも、忙しい毎日ですし、子

供もいますから、そうはできません

ん。」

与右衛門「えんりよはいらない。今

は、体を治すことが一番だ。ここ

のことは気にしないで、自分のこ

とだけ考えるようにしなさい。」

先生は、心を込めてやさしく言っ

て聞かせました。そこで、久子さん

は亀山で養生することを決心しまし

た。

⑪ 久子夫人が亀山に戻って、数十日が過ぎました。そんなある日、飛脚が亀山のお父さんからの手紙を持ってきました。「久子の病気は、とても重いです。すぐに来てくださ

い。」と、書いてありました。

驚いた先生が、大急ぎでかけつけ

た時には、久子夫人は、その二日前

に息を引き取り、葬式もすんだ後で

した。先生は、お墓の前でひざまづ

き、涙をばらはらと、こぼしました。

与右衛門「久子、こんなにつらく悲

しいことはないぞ。私は、何と言

えばいいのだ。」

先生の心には、久子夫人がここ

にこし

ながら、

明るく

みんな

のため

に働い

ていた

姿がう

かんで

は消え

ました。

与右衛門「久子、勉強好きだったな。

門人たちと真剣な顔をして学んで

いたぞ。私はとてもうれしかった。

そして幸せだった。きびしい母の言葉にも、すなおに『はい、はい』とこたえて、がんばってくれたな



正保元年四月没

あ。男の子二人がようやく元気に育ってくれて、私も久子もどんなにか幸せだったことか。あれもこれもみんな久子がよくやってくれたお陰だぞ……。」

先生の心には、家族のため、門人たちのために、一生懸命働いてくれた久子夫人のことが次々と思い起こされました。ただただ、一心に手を合わせる先生でした。

（おしまい）

▼脚本・挿絵

高島藤樹会教材委員会

▼制作委員

足立清勝 飯田典子

石黒紀代子 北川暢子

清川貞治 高谷美智子

山本義雄 (五十音順)

▼参考文献

○児童用副読本『藤樹先生』

(高島市教育委員会発行)

○ふるさと伝記まんが『中江藤樹』

(安曇川町教育委員会発行)

